

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ 5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第35号

2020年3月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65
日本聖公会管区事務所気付
正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者:篠田 茜

「サマリアの女(ヨハネによる福音書第4章)」

主教 オーガスチン 小林尚明(神戸教区)

イエス様はユダヤからガリラヤに旅される途中、シカルというサマリアの町に来られます。旅に疲れ、正午ごろヤコブの井戸のそばに座っておられました。すると一人のサマリアの女が水をくみに来ます。普通、水くみは暑い昼間ではなく朝か夕方の方の作業でした。女は五回結婚し、今連れ添っているのは夫ではないと言います。それは不幸にして死に別れたという事ではなく、人目を避けて水をくみに来るところを見ますと人々からはふしだらな女というレッテルを張られていたのでしょう。人に会えば、また嫌な思いをしなければならぬ、そう思って人に出会わない正午ごろ来たのでした。



イエス様はその女に「水を飲ませてください」と頼みます。あなたは私を助けることができる、ということです。そして水問答の末、イエス様は女に言います。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」と。イエス様は普通の水の話から永遠の命の話へと女を導こうとされます。しかし、まだ女はそのことを理解せず「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」と答えます。水くみがどんなに嫌な仕事かわかります。

永遠の命を頂くためには、自分を見つめ直すしなければなりません。イエス様は女に「あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われ、女に自分を見つめ直すことを求められます。この女はふしだらな生活をしていたということではなく、この後の礼拝問答から考えますと、真実なものを求めて生きていたのではないかと思います。しかし、その真実なものは女の結婚生活の中には見いだせなかったのではないかと思います。

「それはわたしである」

サマリアの人たちは、ゲリジム山で礼拝し、ユダヤ人はエルサレムで礼拝していました。礼拝場所の問題から女は「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます」

と言います。女が求めていた真実を知らせてくださるのは、メシアだということです。するとイエス様はそれに答えて、「それは、あなたと話をしているこのわたしである」と語られます。「わたしである」、それは「エゴー・エイミー」というギリシャ語の言葉で、旧約聖書のモーセに教えられた神様の名前(出3:14)です。イエス様は「神である私が、あなたのメシアとして来たのだ」と女に言われたのです。その時、女は真実なもの、求めていたものをイエス様の中に見たのです。そして、女は「水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません」と伝えます。女は確信をもって、イエス様がメシアだ、と伝えたのです。もしその確信がなければ、会うことも嫌な、自分のことを見下している人々にメシアの出現を伝えに行くことはなかったはずです。もうすでに女の中から「永遠の命に至る水がわき出」ています。

「女性の働きに期待すること、女性の働きと宣教について」

上記の内容について、原稿を書くように依頼されました。“タリタ・クム”を読ませて頂ければ、その活動の豊かさに驚かされます。もしみなさんがもう一步、活動に力強さと確信が頂きたいのであれば、サマリアの女のようにイエス様と語り合うことです。イエス様と語り合うことでサマリアの女は、顔を合わせることも関係を持つことも嫌だった人たちに、過去を乗り越えて出会っていく事ができましたし、何を自分がしなければならぬのかも明確に教えて頂いたのです。

日本聖公会は、最近元気がないと言われます。この状況を打破していく力は、女性のみなさんが、静かにイエス様と語り合うことから与えられます。私はそのことを皆さんに期待しています。イエス様の祝福と導きを祈っています。

「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る」

司祭 セシリア 大岡左代子(管区女性デスク)



12月1日(日)午後5時から、東京教区聖アンデレ主教座聖堂において、「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る」夕の礼拝が行われ、教区を超えて約60名が集いました。(司式：高橋宏幸主教、説教：司祭大岡左代子)

世界各国で「ジェンダー暴力と闘う16日間キャンペーン」と称して、11月25日(女性に対する暴力撤廃の国際デー)から12月10日(世界人権デー)までの期間に、女性と少女へのあらゆる形態の暴力が根絶されることを願い祈る取り組みが行われています。世界の聖公会でもこの取り組みに参加しており、国際聖公会女性ネットワーク(IAWN)からの呼びかけによって、日本聖公会でも、2011年からこのキャンペーンに参加しています。以降、女性デスクからは毎年、各教区・教会に代祷のお願いをしてまいりました。東京教区ではこの呼び

かけに呼応し、3 年ほど前から主教座聖堂の礼拝として実施されてきましたが、今回は管区女性デスク、正義と平和委員会ジェンダープロジェクト共催で行うことができました。

説教では、降臨節第 1 主日にちなみ、ルカによる福音書「マリアのエリサベト訪問」の聖書箇所からこの二人の女性に突然起きた「懐妊」という出来事、その出来事を受けとめていく過程でのマリアとエリサベトの思い、そして二人の間に生まれたであろう心の交流と励まし合いに思いを馳せ、すぐには受けとめ辛い状況に置かれた人々との出会いについて考えました。また「お言葉通りこの身になりますように」とのマリアの言葉は決して受け身的なものではなくマリア自身の主体的な決断と神への信頼であったこと、一方では、このマリアの姿は、キリスト教が女性たちを「従順であるように」とのイメージに押し込める根拠のように扱われてきたことを振り返り、暴力の被害に苦しむ人々をわたしたちが勝手なイメージに押し込めず、一人ひとりの存在を尊重する大切さを共有しました。

礼拝の中で、東京教区聖歌隊が奉唱してくださったアンセムは日本聖公会聖歌集 411 番と同じ詩(作詞 Brian Arthur Wren)によるものでした。香油を注いだ女性、イエスの復活の証人となった女性、存在が無視されてきた女性たちに目を向け、さらにはすべての人に等しく聖霊と賜物が与えられることを歌うこの歌は、礼拝全体を励ますものとなりました。

礼拝後は教会ホールにおいて、ハンセン病療養所での強制堕胎やハンセン病胎児標本問題に取り組んでこられた「くるみくるまれるいのちのつどい」メンバーの孫和代さんをお迎えしてお話を聞きしました。孫さんは、全国の療養所を回り、そこで暮らす方々から様々な経験を聞く中でこの問題に出会われました。紙面の都合上その詳細を記せませんが、差別や偏見によって、無名のまま葬られた子どもたちのこと、療養所における違法な人工妊娠中絶や断種の実態、を聞くにつけ、「いのち」の在り方が歪められてきたこと、その全体は到底抗うことのできなかつた「暴力」であったことを重く受けとめる時となりました。また、療養所の中においても存在する男性優位社会の実態は、より弱い存在に向く暴力の構造を物語っているということを思い知らされました。

日本社会でも、ようやく女性への暴力が、社会問題として認識されるようになってきました。しかし司法の場においても、なお被害を受けた人の痛みや困難さが理解されていない現実があります。「暴力」は人の心と体を傷つけ、その人の人生にも大きな傷跡を残します。わたしたちは目に見えない心の傷、痛みに寄り添うことをイエスから学んでいる者であることを自覚し歩みたいと思います。今後各地で「女性への暴力根絶を求めて祈る」礼拝が行われることを願い、さらに皆様に呼びかけを続けてまいりたいと思います。

(本稿は「日本聖公会管区事務所だより第 350 号」に執筆したものである)

CCA エキュメニカル女性総会(台湾)に出席して

クララ 吉谷かおる(管区女性デスク)

11 月 22 日(金)～26 日(火)、CCA(アジアキリスト教協議会)の AEWA(Asian Ecumenical Women's Assembly/アジアエキュメニカル女性総会)が開催された。会場は台北の南西 70km にある新竹(Hsinchu)市の長老派の神学校、台湾基督長老教會聖經學院キャンパスで



あった。アジア各地から超教派の女性が250名規模で集まるということで、期待と少しの不安を抱きつつ、雪のちらつく札幌から11月でも暖かい台湾の桃園空港に降り立った。日本からの参加者は、新田紗世さん(NCC 青年委員会委員長、日本聖公会青年委員会委員)、藤原佐和子さん(CCA 常議員、NCC 信仰と職制委員会協力幹事/日本福音ルーテル教会)、鄭詩温さん(在日大韓基督教会)

と吉谷の4名であった。アジア各国のアングリカン・コミュニオンからは相当数の女性たちが参加していた。写真はオーストラリア、メルボルン教区のブラックウェル主教、韓国ソウル教区の金基理司祭、東京教区信徒の新田さんとともに写したものである。金司祭はこの総会のモデレーター、ブラックウェル主教は閉会聖餐式の司式をつとめられた。

AEWA をつらぬくテーマは ‘Arise, be Aware to Reconcile, Renew, and Restore the Creation’ (立ち上がり、目覚めよう。和解、刷新、被造世界の修復のために) というもので、22日の開会礼拝から26日の閉会聖餐式まで5日間の会期中は、テーマに沿ったプレゼンテーション、パネルディスカッション、ワークショップ、聖書研究といったプログラムが組まれていた。2日目には日本ルーテル神学校などで講師をされている藤原佐和子博士が「和解のために目覚める—私たちの姉妹の足跡を辿って—」というタイトルでプレゼンテーションを担当された。エキュメニカル運動の中での女性たちの働きを振り返り、日本のフェミニスト神学運動を紹介し、ジェンダー公正を推し進めて私たちみずからが和解のための「預言者的な証人」になるようにと促すこの講演は、共感呼び起こし会場を沸かせた。ワークショップでは「エコ・フェミニズムと気候変動」、「貧困と食の安全」にも参加したが、韓国のユースが中心となって企画した今日の父権制を問う内容のワークショップが最も意義深く感じられた。世界でベストセラーになっている『82年生まれ、キム・ジョン』(チョ・ナムジュ著)が紹介され、各々がジェンダー不公正を実感する場面について分かち合った。またここでは香港の参加者から抗議デモに加えられているすさまじい暴力の実態について聞くことができ、この問題を共有したいというユースの人たちの熱意を感じた。24日は安息日で、グループに分かれてローカル教会を訪問したのち、カルチュラル・イブニング(参加者がそれぞれの国の民族衣装を着て歌や踊りを披露する)が催された。

インドネシア、フィリピン、韓国などは大代表団での参加であったが、ことに青年層が厚く活躍が目立った。私自身まだ経験を積んでいる途中という意識でいるが、現実にはもはや「シニア」である。今回、新田さん、藤原さん、鄭さんという青年に属する人たちが参加したのは幸いであったが、青年が早い段階から国際的な集まりの場に出ているように積極的に支援する必要があると感じる。これからの教会の働きは、SDGs や「宣教の5指標」に示されるように、グローバルな協力のもとに平和と地球環境を守ることが中心となるだろう。課題を共有しやすいアジア女性とのネットワークづくりと、アジアのフェミニスト神学の学びを青年とともに進めていきたい。

大規模な国際会議、しかも初めての開催とあって、スタッフやホスト教会の方々には準

備段階から並々ならぬご苦労があったと思うが、ホスピタリティ溢れる運営で、毎日の礼拝部門も素晴らしく、教派の違いを超えた一致を体験することができた。関係のみなさまに心より感謝申し上げる。この集まりは閉じられてからが本当の始まりであり、「和解、刷新、修復」の未来に役立てるようにそれぞれが派遣されているということを銘記したい。

(本稿は「日本聖公会管区事務所だより第349号」に執筆したものである)

CCEAに参加して

聖職候補生 セシリア 下条知加子(東京教区)



会場ホテルの入り口に

聖公会東アジア教会協議会(CCEA=Council of Church of East Asia)の総会が昨年(2019年)10月2日～7日、マレーシア聖公会サバ教区(東マレーシア)で行われ、日本管区から高橋宏幸主教、小林聡司祭、篠田茜(信徒)、松山健作執事(青年担当)、下条知加子(女性担当)が参加しました。今総会の全体の様子については2019年10月発行の『管区事務所だより』に高橋主教の報告文が掲載されておりますので、ここでは女性の担当者として印象に残った事柄に触れたいと思います。

CCEAは主教を中心として行われてきた協議会ですが、4年毎の総会には信徒や青年の担当者も参加しています。昨年より参加することとなった女性の担当者は、今年初めて総会のオブザーバーとして正式に招かれることとなりました。

女性たちも集まろう！という動きは、以前から参加されていた主教のお連れ合いの声から始まったそうです。彼女らは主教の配偶者として招かれはするけれども、あくまでゲスト。そのプログラムは観光のようなことばかりで話し合い等をする場はなかった。せっかく女性たちが国境を越えて集まっているのに…ということで分かち合いが始まり、主教のパートナー(配偶者)以外の女性も集まる機会としたいという声があがり、女性の代表たちが招かれることとなったのです。



講演されるカロライン・ウェルビー氏

参加した女性たちは、最初のプログラムとしてカロライン・ウェルビー氏の講話を伺いました。お話は「お連れ合いがカンタベリー大主教になったことでご自身の立場が突然変化」したところから始まり、“大主教夫人”となったことに戸惑いつつ働かれる中で様々なご苦労の中から感じ、また考えてこられたことについて語っていただきました。そのご経験から導かれた一番の問題は、「黙想」「学び」「訓練」が必要なにもかかわらず、聖職の“パートナー” — その多くが女性 — にはその機会が与えられてこなかったこと。そして大切なことは、聖職のパートナーという働きに召されたことについて、神さまに問い、

でしょう？」との問いかけが…。

なんとこの友人は「男性同士の夫婦」なんだから、いつも夫婦割を使って映画を見ているとこのことでした。「何も言われたいの？」というわたしの問い掛けに「年齢確認すらされたことがない」との答えです。たしかに見た目は、年上のわたしの方が若く見えそうな落ち着き具合ですので、年齢ではクリアできても、同性同士で夫婦割が使えるなんて、驚きでした。

そして「夫婦でもない人たちが、男女では使ったりするし、あなたたちは女性同士でも法律婚しているんだから、問題なく

対象でしょう。いろいろなカップルがあることを周知していくためにも、使えるサービスは積極的に使った方が良いよ！」というアドバイスをもらいました。

それから、映画を見るときには夫婦割を使って見に行くことにしているのですが、結局二人のスケジュールを合わせるのが難しくて…。割引制度の恩恵にはやはり与れずに、気がつくと思いたい映画は、上映が終了していたりします。やっぱり、映画料金を全体的にもう少し安くしてもらえると、みんなが映画館に映画を見に行くようになるんじゃないですかね？



女性デスクより

■新型コロナウイルス感染拡大防止が急務というこの3月、各地のみなさまの健康が守られ、よい春を迎えられますように祈ります。

■「女性」たちの自主的な集まりとして毎年開催され27回を数える〈聖公会「女性」フォーラム〉ですが、残念ながら今年2020年の開催は見送られ、お休みとなる見通しです。来年の開催地が決まれば、お目にかかれる時を楽しみに『タリタ・クム』紙上でのご案内もさせていただきます。

■今号では、『日本聖公会女性の司祭按手20年感謝プログラム記念誌』51頁、日本聖公会女性教役者・聖職候補生・神学生名簿(2019年3月現在)に一部誤りがあったため、差し替え分を同封させていただきました。昨年は東京教区の朴美賢司祭のお名前を加えた名簿の差し替えをお願いしましたが、このたびは横浜教区のご指摘を受けて清水聖美執事(退職)のお名前を加えたものです。清水執事と横浜教区にお詫び申し上げるとともに、みなさまにお手数をおかけして申し訳なく存じますが、どうぞよろしく願いいたします。なおこの差し替え頁は『記念誌』をお手元にお持ちでない読者のみなさまにも送らせていただきましたので、ご了承ください。

2020年3月現在での女性教役者・聖職候補生・神学生のみなさまについてお知らせしますと、東京教区聖職候補生の藤田美土里さんと九州教区聖職候補生の島優子さんは神学校を卒業、東京教区聖職候補生の中村真希さんは神学校を修了、北海道教区の神学生で聖職候補生志願者の三浦千晴さんは聖職候補生に、東京教区の司祭神崎和子さんは2019年3月末定年退職、東京教区の司祭朴美賢さんは2019年4月から沖縄教区に出向、上田亜樹子司祭は2020年1月1日付米国聖公会ハワイ教区から東京教区に転籍、というように変化がありました。神戸教区の退職伝道師津口和子さんは2020年1月18日に逝去されました。長い間のお働きに感謝し、魂の平安をお祈りします。

■バーバラ・ハリス主教(米国聖公会マサチューセッツ教区補佐主教・退職)が2020年3月13日、逝去されました(89歳)。バーバラ主教は『記念誌』にもメッセージを寄せてくださり、私たちを励まし続けてくださる存在でした。日本からも哀悼の意を表します。



ジェンダープロジェクトより



■「婦人伝道師シリーズ」として6回に渡り、なかなか知ることのできない婦人伝道師の姿を北川規美子さんがお伝えくださいました。1800年代後半から1900年代前半にかけて強い意志と召命と誇りをもって、多岐に渡る働きをしていた婦人伝道師たち、とくに福祉や教育の分野での女性や子どもたちとの関わりは、当時の社会の中でも先駆的なものでした。このシリーズをいったん閉じさせていただき、今年前半にはブックレットとしてまとめることを企画しています。ご期待ください!

■『タリタ・クム』が様々な理由でご不要になった場合は、お手数ですが、以下までお知らせください。次号から中止にさせていただきます。申し訳ございませんが、電話は受け付けておらず、郵送かFAXのみになります。よろしく願い申し上げます。

〒162-0805 東京都新宿区矢来町65 日本聖公会管区事務所気付

FAX : 03-5228-3175

女性とは?

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもありますが、タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは?

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3~4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは?

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。